

(a) ロールシャッハ人間運動反応と時間評価について(ロールシャッハ運動反応に関する文献抄録集)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1265

“sets” upon Rorschach test performance. *Journal of Projective Techniques*, 14, 181 - 187.

ロ・テストを受ける態度を、教示により様々に変えた場合の効果を調べた研究。最初、標準手続でテストを実施し、2週間後、同一検査者が、特別の構えをとるような教示を用いて再検査する。例えば、「できるだけ沢山の人間運動を見るように」教示した群は、M反応の平均は6.85から13.61へと倍増するという。

市村潤 1968 運動反応とその領域に関する研究。

宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」pp. 51 - 74.

MとFMの出現頻度を各カードの領域別に表示した統計的研究。Sは児童、少年、非行少年、成人、精薄、分裂病、神経症の7群で、合計270名である。カード別のみならず、各カードの領域別にMとFMの出現率が検討されている点が特徴的である。

Insua, A. M. 1972 The Holtzman movement variable in relation to problem-solving processes of college students. *Journal of Clinical Psychology*, 28, 199 - 202.

大学生152名にHITを実施し、M尺度で66%ile以上の高M群、33%ile以下の低M群各40名を抽出し、Rimoldiの方法で課題解決能力を調べた。課題は、単純と複雑の2種、それぞれ刺激素材が具体的、抽象的、絵画的の別がある。M変数は、課題刺激の種類とは交互作用なく、どの課題でも高M群は低M群より解決能力にすぐれていることが知られた。

Johnston, W. W. 1975 Inanimate movement—a theoretical paper. *British Journal of Projective Psychology and Personality Study*, 20, 2, 19 - 21.

著者はm反応を精神分析へのアプローチで解釈する。mが表わす不安(精神運動性)は、自律性の葛藤が生ずる肛門期に根ざすもので、対象喪失への自我の懸念・内外の諸力に圧倒されて自我が分裂するのではないかという恐れを表わす。従って、m反応はS反応とも密接な関係があるし、肛門期要因の色彩が強い初期分裂病でmが多発するのであるという。

Kadinsky, D. 1946 Human whole and detail responses in the Rorschach test. *Rorschach Research Exchange*, 10, 140 - 144.

本来はH%の新しい解釈仮説の提唱が主題の論文。

7歳から13歳の児童100人のロ・テスト結果を分析し、Mをもつ人は同時に運動を伴わぬHも多いことを指摘し、M反応は人間像の知覚を表わす一形式にすぎないのではないかという新しい観点をうち出している。

Kadinsky, D. 1956 Zum Problem der Bewegungsdeutungen im Rorschach. *Zeitschrift für Diagnostische Psychologie und Persönlichkeitsforschung*, 4, 218 - 237, 311 - 331.

運動反応の分類とその解釈上の意味を考察した論文。人間運動(BM)、動物運動(BT)、抽象的運動(BA)という内容分類と領域別分類(全体、通常部分、細部分)とを組合せた分類方式を提出し、知覚の分化度という観点からその解釈的意味を提示している。運動反応と形体反応の関係から論じおこし、実例をあげて、運動反応の全貌を組織的に捉えようという試み。

Kagan, J. 1960 The long term stability of selected Rorschach responses. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 67 - 73.

長期間(3年間、6年間)にわたるロ変数の安定度をみた検査一再検査研究。Sは男女75名で、10½、13½、16½歳の3回のロ・テストから9変数(R、攻撃的内容、H、Mなど)の安定度係数を求めた。諸変数の相関は、いずれも低い、なかではMが最も安定していた。M反応が内省的な思考様式を表わし、これは比較的安定した人格変数であると解された。

Kahn, P. 1967 Time span and Rorschach human movement responses. *Journal of Consulting Psychology*, 31, 92 - 93.

Mは時間的展望(time perspective)と相関関係があるとの仮説を検証したもの。小学校児童44名にロ・テストと時間的展望の長短を測る検査(物語完成法)を実施した結果、Mの数と時間的展望の測度とは有意の正相関($\tau = .28$)を示し、仮説は支持された。この所見は、Mも時間的展望も、欲求満足を遅延する能力を反映しているためであると解された。

木場深志 1968 (a) ロールシャッハ人間運動反応と時間評価について。宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」, pp. 96 - 100

Kurz, Cohen, and Starzynski (1965)の追試。大学生19名にロ・テストと時間評価実験を行ない、M%については一致した結果を得た。すなわち、M%の低い者は高い者より時間経過をより長く感ずる傾向がある。しか

し、SCについては、時間評価との相関が認められず、この点はKurzらの所見とは一致しなかった。

木場深志 1968 (b) 父親および母親に対する感情とロールシャッハ第IVおよび第VIIカードにおける人間運動反応との関連 宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」, pp. 110 - 115.

ロ・テストの父親カード・母親カード仮説の吟味。Sの父親（母親）についての作文から、父親（母親）に対する感情が陽性か陰性かを評定し、第IVカード（第VIIカード）に対するM反応の特徴（量と質）との関連性をしらべた。Sは男子高校生120名で、結果は、両者の間に予想したような関係を見出すことができなかった。

木場深志 1971 ロールシャッハ人間運動反応の「型」に関するノーマティブ・スタディ。金沢大学法文学部論集，哲学篇，19, 41 - 61.

M反応の型に関する基礎的標準資料を呈示する目的で、分裂病100名、神経症50名のM反応計410個を対象とし、判定者2名が分類した伸張M、屈曲M、阻止Mについて、カード別・領域別及び疾患別の出現率を求めた。伸張Mは、M反応全体の60%と圧倒的に多いが、屈曲Mは16%に過ぎず、この知見ぬきに個人のMの型を論ずることに疑問が出された。

木場清子 1968 ロールシャッハ・テストにおけるM反応の型とMMPIとの関係。宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」pp. 116-122.

神経症患者、精神分裂病患者各30名をSとしてTaulbee論文（1961）とEndicott論文（1964）の矛盾を検討した。屈曲MとMMPIのD及びPt尺度との関係を調べたところ、神経症では無相関、分裂病ではPt尺度にのみ低い相関がみられた。相関係数の大きさは、前記2者の中間の値を示し、どちらかといえば、Taulbeeを支持する結果と解された。

菊池哲彦 1965 ロールシャッハ・テストにおける「人間運動反応」についての一考察。茨城大学文学部紀要（人文科学），第16号，21-34.

M反応成立に関与する認知的変数をとり扱ったWernerたちの実験、更にこれを発展させたSinger一派の人格的要因に関する諸研究を概観した後、ロ反応に及ぼす薬物効果（アマタール、アルコール、ラボナ等）の知見をまとめた結論として、人格的統御機能の低下がM反応を増加させる内的要因の一つであることを指摘している。

King, G. F. 1955 Rorschach and Levy movement responses : A research note. *Journal of Clinical Psychology*, 11, 193 - 195.

Levy 運動図版が原版と同じ運動反応機能を測定しているか否かを検討。原版でMの多い者はLevy 図版で(1)拒否が少ない、(2)反応時間が短い、という仮説をたて、男子入院患者（神経精神科）100名の資料について検討したが、仮説は支持されなかった。このような結果をもたらしたのは、Levy図版での教示が原法と異なっているためと解された。

King, G. F. 1958 A theoretical and experimental consideration of the Rorschach human movement response. *Psychological Monographs*, 72, No 5 (Whole No 458)

Mの新しい解釈仮説として、Mが「対人交渉の時空に自己を投射する空想能力」をあらわすと考え、これを精神病患者群について検証した。100名の患者の中からMの多い群、Mの少ない群各30名を選び、年齢・知能・診断種別などは等質にした。患者の病気・病因に対する態度を比較した結果、上の仮説は支持された。

King, G. F. 1960 An interpersonal conception of Rorschach human movement and delusional content. *Journal of Projective Techniques*, 24, 161 - 163.

前論文（1958）のMに関する解釈仮説の実証。妄想型分裂病患者で対人妄想をもつ者は身体的妄想をもつ者よりMが多いという仮説をたて、対人妄想をもつ者と身体妄想をもつ者を年齢・教育・言語量・Rで個別にマッチングした14組についてMの個数を比べた。14対のうち対人妄想の方がMが多いのは11組、同数2組であり、仮説は支持された。

Klein, A. and Arnhem, R. 1953 Perceptual analysis of a Rorschach card. *Journal of Personality*, 22, 60 - 70.

Arnhem (1951)のあとをうけて、ロ・テストの第Iカードの知覚的特徴について分析を加えたもの。第Iカードの全体的な図形構成、下位部分の区別と諸種の部分のまとまり、形態特徴とバランスなど、とくに運動反応の成立を促進する形態的特徴について分析している。

Klein, G. S. and Schlesinger, H. J. 1951 Perceptual attitudes toward instability :I. Prediction of apparent movement experiences from Ror-